

マックス・ウエーバーの入門書がほぼ同時に二冊刊行された。一方は伝記に焦点を当て、他方は同時代の思想連関に焦点を当てるが、いずれも「リアルな政治」をテーマとする内容豊かな労作である。浮かび上がるのは、学者の鏡とされる

北海道大学大学院教授

橋本 努 評

ながらも政治的に血の気の多い危険な人物としてのウエーバー像だ。

今野によれば、ウエーバーは少年の頃から軍事に関心があった。諸民族の精神を歴史的に考察したり、普興戦争の舞台を一人で旅したりもした。大学生になる

と自ら志願してプロイセン陸軍に入営する。半年後に小隊長に昇進し、書く手紙には自信たっぷり、「一年志願伍長」と署名している。兵役後もウエーバーは何度か軍事訓練に参加する。有事の軍隊指揮官の資格を得ようとしたためである。

愛国心に燃えるウエーバーは、政治的にはポーランド人労働者を排斥するナシヨナリストとして頭角を現した。かれはこのテーマの講演を繰り返し、ドイツ・ナシヨナリズムを扇動する「全ドイツ連盟」に加盟してもいる。第一次世界大戦が勃発すると、ウエーバーはすでに五〇歳を過ぎていたが兵役を志願、陸軍大尉の資格を与えられた。

ナシヨナリストという
と、今日では保守主義に結

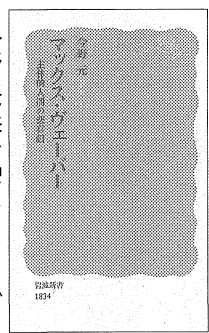
現在の日本人が学ぶべき、この「血の気」

びつくが、当時は台頭する進歩派の労働者階級に支えられていた面もある。ただウエーバーが期待を寄せたのは、カリスマ的な指導者によつて牽引される民主主義。その理想は全体主義と無縁ではないだろう。ウエーバーの死後、ドイツではヒトラーが台頭する。この二人は社会的ダーウィニズムを信奉したり軍隊的な体育訓練を重視するなど、さまざまな点で似ている。わずか五六歳で死去したウエーバーだが、長生きしていたらヒトラーに期待したかもしれない。一方、ウエーバーにとつて、戦後の民主化したドイツは生きにくい時代になったのではないか、というのが今野の解釈である。

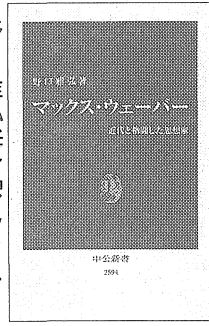
これに対して野口は、ウエーバーがもし長生きしたら、ヒトラーに徹底的に抵抗したのではないかと推測するが、それでもウエーバーはかなり危なっかしいと指摘する。
興味深いのは野口が論じるように、戦後の日本人が大塚久雄を通じて、ウエーバーから中間的生産者層の勤勉精神を学び、全体主義に抗する主体性を獲得しようとした事情である。ウエーバーは戦後の日本で市民派の思想家として祀られた。その後、別のウエーバー解釈も現れるが、では私たちは、いま何をウエーバーから学ぶことができるのか。二冊が描くウエーバーは、リアルな政治に物言う闘争的な人間であり、あまりに人間臭い。現在の日本人に足りないのはこの「血の気」であろうか。
今年ウエーバーの没後一〇〇年。スペイン風邪で亡くなったと言われるウエーバーの偉業を、私たちはコロナ禍で再確認することになった。二冊の刊行を喜びたい。

読書

本の値段は税抜きです



今野元(著)『マックス・ウエーバー 主体的人間の悲劇』(岩波新書 800円)



野口雅弘(著)『マックス・ウエーバー 近代と格闘した思想家』(中公新書 800円)

◆
こんの・はじめ 愛知県立大学外国語学部教授。博士(法学) (東京大学)。
のぐち・まさひろ 成蹊大学法学部教授。哲学博士(ボン大学)。